

# 新潟大学

## 実施報告

### (1) 実施責任者報告

新潟大学学生部長 石田幸平

(放送公開講座実施委員会委員長)

#### 1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

新潟大学では「開かれた大学」を目指して、学長、部局長などで構成されている「新潟大学公開講座委員会」が設置され、その下に放送利用による公開講座の実施を担当する「放送公開講座実施委員会」（委員は全学の学部、部局から1名）と、学内施設や公民館を活用して開かれる一般の公開講座の実施、運営を分担する「公開講座実施委員会」の二つの委員会があって、それぞれ全学協力態勢でこの業務に取り組んでいる。放送公開講座に対する学内の理解は定着しつつあり、さまざまな企画が積極的に寄せられており、時間をかけて講座内容を充実させようとする機運が高まってきている。

直接放送に携わる「新潟放送（BSN）」のスタッフは、大学側と頻りに連絡をとり、企画段階から視聴者の立場を考えた意見を寄せ、受講生にとって理解が容易な番組制作に熱意を示している。また、受講生募集やスクーリングのPRについても全面的に協力してきている。

また、新潟県教育委員会をはじめとする地域の公民館等も受講生の募集や番組の再視聴、そしてスクーリングに活発な協力を示すなど放送公開講座に期待をかけ、大学との連携姿勢が顕著にみられる。

#### 2. テーマの選定とそのねらいについて

今年度はテレビ講座として「変動する地球－日本列島の成り立ちとその背景－」をテーマに選定した。昭和60年度に実施したテレビ講座「にいがた 自然と環境」が好評であったこと、とりわけ受講生の地学についての関心が高かったことから、その領域におけるより深い内容の講座を実現しようとする意図したものである。そこで、地球の変動に関する新しい知見、日本列島についての変動諸説を比較検討し、今まで何が明らかにされ、何が問題として残されているかなどを解説することにした。

ラジオ講座については、大学においても企業においても現代青年をどう教育していったらよいか疑問が寄せられていることから、「現代青年のライフスタイル」というテーマを選定した。現代青年に対するどちらかといえば主観的な批判が多いなかで、過去の青年との異同性を客観的にとらえ、成人は、どのように青年たちに接していけばよいかを示唆する内容のものを意図した。

### 3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

テレビ講座では、内容が地学であり、その特色を生かすためにできるだけ現地取材を行い、講義内容も映像を通して明確に理解できるよう極力図示するように努めた。番組は印刷教材を持たなくても理解できるよう構成した。したがって、多少難解で理論的な事柄は印刷教材において詳しく説明し、テレビと相互補完しながら学習していくよう図った。また、学習指導の回数と場所を増やし、地元で講義が受けられるという形式を導入し、受講生が積極的に学習できるよう計画した。

テレビ講座と同様にラジオ講座も女性アナウンサーが受講生を代表する形で質問し、各講師がそれに応答していく形態をとった。講義だけでは単調になるので、できるだけインタビューなど現地取材に努め、聴取者の関心を惹きつけるようなものを目指した。印刷教材にはなるべく図表などを載せて、わかりやすくかつ詳細な解説を行うようにした。学習指導は、テレビ講座と同様な方法をとった。

### 4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

テレビ講座は地球の変動に関するプレートテクトニクスの考え方と、それと異なる立場であるコア・マントル境界変動説とを対比して、日本列島の成立過程を紹介する内容のものである。主任講師の情熱あふれる解説に受講生からたくさんの反響があり、自然科学における事実のとらえ方にいろいろなものがあることを知り得たという喜びの反応がみられた。ただし、一部の受講生からは、内容が難解であるという意見も寄せられた。

ラジオ講座は、現代青年が成人の目からは大きく変わっているために教育者や経営者から期待されるところがあった。スクーリングの際にはいろいろな質問が寄せられ、受講生たちの関心の強さがうかがわれた。特に、逸脱行動を示す男女学生たちのライフスタイルを問題にした部分については、質問も多く、青年期の子を持つ親たちの関心事であることがわかった。

### 5. 印刷教材の作成過程について

今回はテレビ講座が14名、ラジオ講座が5名の講師というように多数の講師を抱え、テキスト作成の過程でいろいろと困難があった。

印刷教材作成のため「テキスト作成専門部会」という委員3名の小委員会を設け、ここで「テキスト作成要項」を定め、これに基づいて原稿執筆を各講師に依頼した。しかし、上記のとおり執筆者が多数のため表記にさまざまな不統一が生じ、委員を通して修正作業を行った。特に、テレビ講座の場合には、文献の引用が多く、その記載の統一には時間がかかった。ラジオ講座の場合には、放送では視覚に訴えることができないので、テキストにできるだけ写真を使用して、視覚的刺激を添えるよう努めた。

### 6. 学習指導の実施状況について

学習指導は前年度の2回から4回へと回数を倍増した。テレビ講座・ラジオ講座とも第1回は放

送開始に先だち開講式を兼ね、式は簡略化し、時間の大半を事前のガイダンスに充当した。第2回、3回は、テレビとラジオそれぞれ異なる日時、会場において学習指導を行った。テレビ講座の場合には、岩石など実物を供覧して指導を行ったので、受講生から十分理解できたとの好評を得た。ラジオ講座の場合は、受講生全員が質問や感想を発表し、活発なスクーリングを展開できた。第4回は、テレビ・ラジオとも閉講式を兼ね、主任講師による「まとめ」の講義と質疑応答を行った。なお、ラジオ講座の場合、前年度評判のよかったVTRの利用を今回も施行し、視覚に訴えて講義内容を明らかにするよう努めた。

(実施日時、会場、出席者)

		第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回
テレビ講座	実施日時	昭和62年 9月27日 (日) 13:00～15:00	昭和62年10月25日 (日) 13:00～15:00	昭和62年11月 1日 (日) 13:00～15:00	昭和63年 1月17日 (日) 13:00～15:00
	会場	医学部第1講義室	小千谷市民会館	上越文化会館	医学部第1講義室
	出席者数	65人(24.4%)	30人(11.3%)	27人(10.2%)	50人(18.8%)
ラジオ講座	実施日時	昭和62年 9月27日 (日) 13:00～15:00	昭和62年 9月27日 (日) 13:00～15:00	昭和62年11月15日 (日) 13:00～15:00	昭和63年 1月17日 (日) 10:00～12:00
	会場	医学部第4講義室	長岡市立中央図書館	新発田市公民館	医学部第4講義室
	出席者数	36人(25.9%)	15人(10.8%)	18人(12.9%)	28人(20.1%)

## 7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

高齢化社会の進行に伴って、高齢者の生涯学習に対する要望は年々高まりつつある。加えて社会の急速な進展に対応するため、あるいは女性の地位向上からくる学習意欲の高まりがあったため、レベルの高い公開講座を求める人々が急速に増え、テーマに関してもいろいろと希望が寄せられてきている。

こうした社会の要求に応じて、これからの大学は教育と研究の成果を地域社会に開放していく責務があり、従来から公開講座と取り組んできた。そうした状況の中で特に放送利用による公開講座は、遠隔教育というハンディキャップをもちながらも、スクーリングの機会を増やすことなどによって、現状では最も有効な教育手段の一つとして地域社会に貢献していくことができ、その担う役割は大きいと思われる。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

前年度はテレビ講座の視聴を医学部進学課程の学生に呼びかけたが、今年度はテレビ・ラジオの両講座の視聴を教養部の学生に勧めた。なお、テレビ講座は、来年度の教養部の授業に活用する方向で、現在、放送公開講座実施委員会において検討中である。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

- (1) 前年度と同様に、今回のテレビ講座も自然科学の分野で、最新の知見を受講生に理解させる点で苦労があった。難解な内容を受講生に十分理解させるよう努力したが、テキストについては「難しい」という意見がかなりあった。また、「図表などはもっと簡単にしたい」との要望も割合多かった。
- (2) 1回の放送が45分間より30分間のほうがよいという見解もあり、今後慎重に検討する必要がある。
- (3) ラジオ講座の場合には、前年度のような音楽に関する講座とは異なり、どうしても単調になりがちで、インタビューを挿入することで刺激を豊かにしようと図った。しかし、講師の話のほかにもっと魅力ある音刺激を活用すべきであったと反省している。
- (4) スクーリングの回数を増やしたことは好評であったが、スクーリングに一般視聴者の参加を許すようなことも考えてよいのではなかろうか。放送公開講座を地域社会に根づかせるためにもよいのではないかと思われる。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 変動する地球 一日本列島の成り立ちとその背景一

主任講師： 積雪地域災害研究センター教授 藤田至則

1. 科目設定のねらい

技術革新のおかげで、手つかずの海洋や地下深部についての知見が得られるようになったため、地球の変動についてのいくつかの体系的な見方が生まれた。こうした見方には、まだ仮説の要素が多く含まれているが、その限界を指示さえするなら、それらを講義することは、(1)あれこれの地学の現象のおもしろさだけでなく、それが地球の変動のどんな部分に位置するかが学べるであろうこと、(2)どんな見方であれ、その発想のおもしろさや難しさを理解してもらえれば、科学的思考の展開過程についての理解が深まるであろうこと、などに意義があると考えた。

幸い、本学には、学長をはじめ、理学部、教養部、積雪地域災害研究センターなどに、地球の変動の研究分野に関する多くの専門家がおり、これに不足分野の専門家を外部から迎えるならば、系統だった講義が行えると考えた。

## 2. 科目構成と放送上の工夫

第1回は、近代的な地球の観測技術の紹介、それによって生まれた地球の変動の見方を、水平方向の変動を重視する水平説と、垂直方向の変動を重視する垂直説に分けてその違いを講義した。第2回は、大陸移動説と、水平説を代表するプレートテクトニクスについて講義した。第3回～第6回は、プレートテクトニクスによって、日本列島における約2億年前以後の変動について講義した。第7回は、約3億年前の日本列島と大陸の古生物の比較から、プレートテクトニクスによるパシフィカ説と違った見方を講義した。第8回～第11回は、約2億年前以後、日本列島の変動を垂直説によって講義した。第12回は、地球内部の変動によって、地表の変動がどこまでよく説明できるかについて講義した。第13回は、実例によって仮説の意義や役割について述べ、日本でなぜプレートテクトニクスが流行するか、日本になぜ仮説がなかなか生まれないかなどについて講義した。

苦心したことは、(1)ビデオ撮りのための各地の素材の選択、(2)カメラの及ばない海域、大陸などの資料をわかりやすくするための図・表の作製、(3)事実と仮説の関係を説明するための解説などであった。

各回間の整合性や統一性などを図るために、主任講師が、毎回そのはじめにつなぎの解説をしたが、それは成功したようである。

## 3. 結果と反応

正式に登録した受講生は例年になく多かったが、最終のスクーリング、公民館の集会、各地での接触で得られた情報から一般視聴者も少なくなかったようである。特に、中学校、高等学校の理科教師や官庁・会社の技術者が多く視聴したようである。受講生が30歳～40歳台がピークであったことから、幅広い層で視聴されたものと推定できる。内容は少し難しかったと反省しているが、モニター、スクーリング、公民館の集会、各地での反応などからすると、理解度は決して低くはなかったように思う。素材を少なくして理解度を高めようということは、昨年度のシンポジウムでも言われたことで、はじめから心がけたのではあったが、いかに困難なことであるかということがわかった。

(ラジオ科目) 現代青年のライフスタイル

主任講師： 教養部教授 石田 幸平

### 1. 科目設定のねらい

現代青年が示すさまざまな風俗や行動様式が過去の青年と比べて大きな隔たりがあると一般に考えられ、現代青年の存在を特徴づける呼称として「新人類」とか「異星人」という言葉が流行している。そして現代青年に直接接する教師や経営者のなかからは、このような青年たちをどのように扱い、教育していったらよいのか、という切実な声が起こってきている。

しかし、現代青年のライフスタイルについて客観的な調査研究が十分に行われておらず、主観的

な論調が支配しているのが現状である。そこで、まず現代青年を正確にとらえた青年心理学の新しい知見を紹介することから始めねばならない。

本科目の前半部分においては、現代青年の一般的なライフスタイルを発達諸相（中学生、高校生、大学生等）に分けて論考し、新しいデータをもとに過去の青年たちの行動様式と比較していくことにした。

次いで、こうした一般的な青年の適応スタイルとは反対の、非社会的ないしは反社会的の青年たちのライフスタイルを浮き彫りにしていく。そして最後に、本科目は、このようなさまざまな現代青年のライフスタイルがどのようにして生まれてきたのか、また、どのような接し方をしていけばよいのかを探ってみようというわけである。

## 2. 科目構成と放送上の工夫

第1回から第3回までは現代青年の基本的特徴を他世代と比較して検討するとともに、現代青年を理解する上で重要な鍵となる専門用語を解説した。続いて、第4回から第6回にかけては現代青年の一般的なライフスタイルを中学生、高校生、大学生について具体的に解説し、これらの青年が将来に向かってどのような展望を抱いて生きていこうとしているかを明らかにするよう努めた。第7回から第12回までは社会的基準から逸脱した青年たちの非社会的ないし反社会的なライフスタイルをみていった。すなわち、摂食障害の女子青年、ステューデント・アパシーの男子学生、暴走族の若者たち、非行少女たちの事例を具体的に提示するようにした。第13回は、以上の放送内容を総括して過去の青年と現代の青年の異同性を対比し、教師や経営者が学校や職場においてどのように青年と接していけばよいかを検討した。

講義内容は身近なテーマであり、日常いろいろ論議されていることを対象にしており、どのように学問的に平易な解説をし、偏見から自由な見方を受講生に提供していくか、担当講師はそれぞれ苦勞をした。その点で、以下のような工夫を凝らしたつもりである。

- 女性アナウンサーを受講生代表のような立場において、アナウンサーの質問を通していく形式をとった。
- できるだけ単調な講義にならないようにするため、インタビュー取材などを挿入するよう努めた。
- インタビューにおいて、特に非行少女の場合などは特定の個人であることが判明しないよう配慮し、収容施設側の了解もとった。また、どうしても症例などを直接本人から録取できない場合には、手記や手紙などを利用した。

## 3. 結果と反応

前年度と異なり、5名の講師による科目であり、内容が十分に統一されておらず、また、テーマを絞りきれていない面があった。しかし、時宜を得たテーマであったので、反響は割合に多く、特に後半部の社会的基準から逸脱した青年を扱ったところでは、電話・手紙等による意見が寄せられ、一般聴取者の関心も非常に高いことがわかった。

## 制作報告

### (1) 制作責任者報告

新潟放送ラジオ局制作部長 対 間 英 洋

#### 1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

(ラジオ)

- ① 今回は「現代青年のライフスタイル」という一般の聴取者にとっても、非常に興味深いテーマであるだけに、より多くの人々に聴きやすい、わかりやすい番組づくりを主眼とした。
- ② 5人の講師による講座のため、13回シリーズの一貫性を維持するように努力した。各回の録音に主任講師の立ち会いと解説をお願いした。
- ③ 矯正施設での取材にあたっては施設長と協定書を締結し取材対象少年の人権保護に十分配慮した。

(テレビ)

- ① 変動する地球、最近、地震・噴火などで地球そのものがマス・コミなどを通じて見直される傾向にあり、タイミングも良かったことから、より多くの一般県民に視聴してもらえる番組づくりをめざした。
- ② 地元の新潟大学が、研究成果を地域の人に知ってもらうことを目的として、新潟を意識した視点から地球そのものへ発展させるようにした。
- ③ 取材が全国的規模になるため、北海道教育大学、富山大学、東京大学、地震研究所、東海大学、熊本大学、郵政省電波研究所、通産省地質調査所、海上保安庁水路部、金属鉱業事業団、石油公団、佐渡金山などの協力を得て番組づくりをすすめた。

#### 2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

(ラジオ)

- ① 各回のサブタイトルの決定にあたっては、制作スタッフも加わって、できるだけ放送向きの内容を簡潔に表現した魅力的なものにした。この方式は、放送公開講座を開始して以来、採り続けているもので、講師と制作スタッフ相互の番組に対する理解に大いに寄与している。
- ② 各講師に原稿読みでなく、メモだけで話していただいた。ご面倒をおかけしたが、自然の語り口がラジオに欠かせない聞きやすさの条件だからである。
- ③ 今回テーマミュージックを過去の弦楽四重奏から今を感じさせるシンセサイザーによるオリジナル曲に改めた。
- ④ 各回45分の対話による単調さを防ぐため、オートバイ音、音楽などを入れ、極力アクセントをつけた。

(テレビ)

- ① 地球の変動について、学会では、水平説（プレートテクトニクス説）と垂直説（コアマントル変動説）が対立しており、おたがいの説を公平に紹介し、事実と仮説の関係の明確化を目指した。
- ② 地表に現れた地層や岩石から、地球の変動の謎解きをする構成をし、現地取材をなるべく取り入れるようにして、北海道から茨城、山梨、岐阜、静岡、富山、広島、熊本、隠岐など日本全国に取材範囲を広げた。
- ③ 第1回と第13回目に地球の変動説についての移り変わり、対立点はどこにあるか、何がわからないのか、何がわかればよいかを解説して視聴者の便宜を図った。

### 3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

(ラジオ)

放送時間は講座スタート以来、日曜夜9時～9時45分枠で、放送期間中の11月15日（日）個人聴取率調査があり、0.3%であった。該当番組はシリーズ前半の現代青年の一般的なライフスタイルを講義内容としたもので、受講生を除く一般聴取者にとっては馴染みにくかったものと思われる。

後半からの社会を逸脱した青年達のライフスタイルに入ってからラジオに寄せられる電話は非常に多くなった。

内容もテキストが欲しいとか、きけなかった講座の内容を知りたいといった真面目なものであった。

(テレビ)

地球の変動についてプレートテクトニクス説のみしか知らない人が多く、それと対立するコアマントル変動説もあることを紹介したところ大きな反響があった。

例えば、日本海は大陸から日本列島が引き裂かれてできるものか、あるいは陥没してできたのか等おたがいの論点を明確にして番組を進めた。

期間中 10月17日（土）7:00～7:45の視聴率調査は1.2%あり約30,000人が視聴したことになる。

### 4. 実施上の問題点と今後の課題等について

(ラジオ)

- ① 大学側の深いご理解で、年毎に制作期間は長くなってきているが、正味1年程度は欲しい。
- ② ラジオは音声ですべてであり、話し言葉による自然な対話が鉄則であるとの考えから各講師に書き言葉がそのまま話し言葉にならないことを理解していただいた。  
同様に、学術用語や外国語についても、いい換えられるものはできるだけいいかえたい。
- ③ テーマ決定にあたっては、今後とも高い専門知識が必要とされるような難解な科目でなく、一般の欲求にあい、然もラジオにふさわしいものでありたい。



(テレビ)

- ① 今回は難しかったという評が寄せられた。大学公開講座の性格上、レベルを落とさず、分かり易く番組をつくるための方法論をこれから新潟大学側と研究したい。
- ② 図表の内容について、もっと単純化、簡略化できないか、担当講師ともう少し事前に話し合いが必要と思う。

(2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) 変動する地球 一日本列島の成り立ちとその背景一

制作担当者：新潟放送テレビ局制作部副参事 大沢道義

「難しかった」というのが率直な感想である。「地学」という馴染みの薄い学問(担当ディレクターにとって)、難解なテキスト(受講生からもそのような声が聞かれた)を番組に仕上げるまでの作業。主任講師や担当講師の熱意に助けられながら、まず、自分が理解すること、あいまいなまに台本は書かないこと、どうしたらわかり易く、面白く、楽しく見てもらえるか悪戦苦闘の連続だった。にもかかわらず、受講生やモニターの反応は「難しかった」が多かった。しかし、難しかったが「興味が持てた」「回を追うごとに面白くなった」「少しずつ理解できるようになった」と特に後半に進む程上々の評価をもらえた。初回から上首尾でなかったのは当方の責任であるが、各回の収録を終える毎に、主任講師、担当ディレクター(今年は3人で取り組んだ)、アナウンサーが寄り合い、反省点の洗い出し、次回良くするための検討をどのような細かい点についても行った事が後半の成果につながったと思う。

「興味」と「面白さ」と「理解」を得られた回(つまり評判のよかった回)の共通項は、①内容が身近であること(地球規模の話であっても「新潟」という地域を意識した視点で語られること)、②現地取材が豊富であること(地球の変動についての見方はわずかな事実をもとにした仮説であるがそのわずかな事実を実写で体験することで良くわからない地球へのロマンをかりたてられる)、③図表はできるだけ少ないこと、簡略であり、鮮明な色彩であること(多すぎると説明がおろそかになり、説明されない文字があるとかえって理解を難しくする。ちなみに今年度は13回で約260枚、1回平均20枚だったがこの半分くらいが望ましい)、④講師が普段の持ち味、を発揮し、リラックスすること(テレビ収録は数々の約束ごとや制約があるが、台本があっても無きが如く、情熱をもって語りかけるといふ態度が好感が持てる。特に、主任講師の最終回は後半約10分「顔」だけの講義だったが、説得力がありすばらしかった。)

「難しかった」けれども、収録を終えて毎年味わう充実感、やりがいのある仕事という感想に変わりがなかった。放送利用による大学講座への一般の期待が年々高まっていると実感されるからである。

29歳の主婦から寄せられた感想の一部を紹介したい。

『「変動する地球」も、何回となく視聴させていただくと、今までは無縁のものと思っていたもの

が、海に行けば浸食に目をやり、これも地球規模で見れば、ほんの一瞬のことなのだろうなと思い、山へ出て行けばつい地層が目に入り、この小さな山も何億年の歴史があるかしらと思う。テレビなどで、新しい化石が発見されたと聞けば、この事実で、いくつかの仮説が生まれ、そしてまたいくつかが消えていくのかしらとふと思うようになった。』

担当ディレクターも全く同じ習慣が身につけてしまった。

(ラジオ科目) 現代青年のライフスタイル

制作担当者: 新潟放送ラジオ局制作部 参事 児玉元彦

ラジオ放送利用の大学公開講座も、今年で3年目ということで、制作する我々も直接当たっていた新新潟大学側でも、制作上のスケジュールはわりと順調に進んだように思われる。ただ講師の先生方は初めてということで、今回主任講師を務められた石田幸平教授をはじめ、5名の担当講師の皆様方には大変な手間と労力をかけていただき感謝している。

## 1. 今回のテーマ

さて、今回のテーマは「現代青年のライフスタイル」ということで、大変身近な問題であった。

新人類とか異星人とかいわれている現代青年は、今までの青年とは違っているのかなど、心理学的な面から考察を行った。そして、青年期を語る時、社会的状況を切り離しては語れないということから、講座の前半の回は一般的なライフスタイル、そして後半は非社会的、反社会的なライフスタイルをテーマに取り上げた。一般的な考察も「現代青年のライフスタイル」というテーマを語るには割愛できるものではなくアイデンティティやモラトリアムそして青年期の大きな部分を占める学生生活からの考察をしたわけであるが、この部分の回数は放送ではもう少し減らしてもよかったのではないかと思った。というのは、受講生も聴取者も、日常家庭でまた企業内でもこの青年達と接し見つめているわけで、目新しい部分、ハッとするものを感じたかという疑問があるからである。

放送中の局への問い合わせなどが再々きたのは、後半の非社会的、反社会的なライフスタイルを放送してからであった。

実際、制作を担当させてもらった私自身、現代青年の学生・アパシーモラトリアム人間の話を知ると、自分でもそうでないかと思ってみたり、少年院で非行少女のインタビューをしては、彼女達に今までと違った見方や考え方をもつことができたり本当に勉強になった。

一般の聴取者にとっても、本当の姿を知らない暴走族や拒食症の青年達の心を、私だけでなく興味深くきいてもらえたのではないかと思っている。

## 2. 番組の構成について

番組構成は基本的には、通常のトーク番組のようにするため、先生おひとりの講義形式をやめ、

アナウンサーを聞き手として、全編対談形式で進めることにした。そして、従来と違って主任講師のほかに4名の担当講師の先生が10回を講義されたので、番組の結びには、その日のまとめを主任講師がお話された。たくさん先生に担当いただくのは、それぞれ専門の所を掘り下げてお話いただけるのだが、放送に慣れていただくのにそれぞれご苦労があったと思われる。

また、番組がやわらかくもなろうし、聞きやすくもなろうと、取材テープやレコードを多用することに心掛けた。この点、手間は掛かるもののそれだけ効果はあると思われるので、今後ともやっていきたい。

それに加え、最終回は担当の先生方のうちの3名にお集まりいただき、座談会を放送した。これは、聴取者の方からも、こういった新人類のライフスタイルはわかったが、いったいどうつきあったらいいのかという疑問もあり、昔の青年と今の青年は違うかななどを語り合っていた。

結局、新人類などと、我々大人と遊離しているように言っているが、その時代のライフスタイルはその時代の大人達、社会が造りあげているものではないだろうか、これが今回の結論であったように思う。

## 講座の概要

## ＜科目の概要＞

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法
変動する地球 ー日本列島の 成り立ちとその 背景ー (テレビ)	地球探査の技術革新を背景として生まれた地球の変動についての新しい見方がどのようにして構成されてきたか、それらを日本列島に生じた諸変動に適用した多くの例、諸変動の源泉としての地球内部に関する情報、地球に関する諸変動論の比較などから、どんな課題が今後に残されているかについて考える。	現代における地球の変動に関する新しい考え方、それらから生まれた日本列島における変動諸説、それらの比較・検討によって今まで何が明らかにされ、どんな問題が残されているかなどについて考えながら、現代地学における地球の変動の研究の進歩について述べる。	地球の変動についての学説(仮説)の変遷、その一つのプレートテクトニクスの考え方、それを適用した日本列島における変動論、それと違った考え方を適用した日本列島における変動論、変動の源泉としての地球内部の情報、各変動論の比較から考えられる今後の問題などについて述べる。 説明は、身近な事例からしだいに地球規模の事例へと視点を広げていく方法をとる。
現代青年のライフスタイル (ラジオ)	1980年代の新しい社会的状況のなかで、青年がどのようなライフスタイルを身につけ、どのような問題を抱えているのかを考察する。	青年期は、児童期よりも常に社会的状況によって規定されるといわれる。 1980年代の新しい社会的状況に対して示す現代青年たちの一般的なライフスタイルとともに、その状況に適應できない非社会的及び反社会的なライフスタイルを明らかにする。	前半は、現代の社会的状況に適應している現代青年の一般的なライフスタイルを青年前期・中期・後期に分けて考察する。 後半は、逸脱行動のライフスタイルを示す非社会的及び反社会的青年について論述する。 できるだけ青年に対するインタビュー形式等を取り入れ、彼らの生き方や考え方を具体的に示していく。

## ＜各科目の構成＞

(テレビ科目) 変動する地球 ー日本列島の成り立ちとその背景ー

主任講師：積雪地域災害研究センター 教授 藤田至則

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月3日	変動する地球 ー考え方の移り変わりー	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第2回	10月10日	大陸漂移説からプレートテクトニクスへ －現在みられる大陸の割れ目－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 新潟大学長 津田禾粒
第3回	10月17日	押し寄せた島々 －成長した日本列島－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 理学部助教 立石雅昭
第4回	10月24日	衝突した北海道 －地表に露出した地殻の底－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 理学部助手 宮下純夫
第5回	10月31日	圧縮された日本列島 －地震と活断層－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 理学部講師 卯田強
第6回	11月7日	引き裂かれた日本海 －折れ曲がった日本列島－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 理学部助教授 周藤賢治 新潟大学名誉教授 茅原一也
第7回	11月14日	化石からみた2億6000万年前の世界 －大陸続きの日本列島－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 教養部助教授 田沢純一
第8回	11月21日	大陸時代の日本列島 －広島変動－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 北海道教育大学助手 雁澤好博
第9回	11月28日	大陸から分離した日本列島 －グリーンタフ変動－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 理学部教授 吉村尚久 " 教授 小林巖雄
第10回	12月5日	浮上する日本列島 －島孤変動－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 " 助教授 高濱信行 通商産業省工業技術院 地質調査所主任研究官 鈴木尉元
第11回	12月12日	陥没した日本海 －削り込まれた大陸－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則
第12回	12月19日	地球内部を探る －変動の要因を尋ねて－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則 東京大学地震研究所教授 南雲昭三郎
第13回	12月26日	地球の変動論 －その事実と仮説－	積雪地域災害研究センター教授 藤田至則

## (ラジオ科目) 現代青年のライフスタイル

主任講師：教養部 教授 石田 幸平

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月18日	豊かさのなかの若者 -青春はバラ色か-	教養部教授 石田 幸平 " 教授 木原 孝
第2回	10月25日	感性の時代 -管理社会のなかでの青春-	"
第3回	11月1日	アイデンティティとモラトリアム -生き方の模索-	"
第4回	11月8日	中学生の学校生活への適応のスタイル -友達とのおしゃべりが大切な 中学生-	教養部教授 石田 幸平 教育学部教授 竹下 由紀子
第5回	11月15日	高校生・大学生の学校生活 -深い友人関係のない高校生、 勉強時間の少ない大学生-	"
第6回	11月22日	進路選択にみる生き方 -目標の不明確な進路意識と 職業選択-	"
第7回	11月29日	私はもう食べたくない -摂食障害にみる現代青年女子の 病理-	教養部教授 石田 幸平 医療技術短期大学部教授 塚田 浩治
第8回	12月6日	独立への延期 -現代青年の不安と現代社会-	"
第9回	12月13日	暴走族の叛乱 -遊びとしての逸脱-	教養部教授 石田 幸平 東北大学文学部附属 日本文化研究施設助手 佐藤 郁哉
第10回	12月27日	豊かな社会と若者たちの冒険 -ライフスタイルの模索-	"
第11回	12月27日	保護領域を出ていく少女たち -安全地を求める非行少女-	教養部教授 石田 幸平
第12回	1月3日	裏社会に生きる少女たち -逸脱の固定した非行少女-	"
第13回	1月10日	現代青年のライフスタイル -本当に青年は変わったのか-	教養部教授 石田 幸平 " 教授 木原 孝 医療技術短期大学部教授 塚田 浩治

新潟大学

<スクーリング>

(テレビ科目) 変動する地球 ー日本列島の成り立ちとその背景ー

回数	会場	実施日時	備考
第1回	新潟大学医学部 第1講義室	昭和62年9月27日(日) 13:00～15:00	開講式を兼ねる。
第2回	小千谷市 小千谷市民会館	昭和62年10月25日(日) 13:00～15:00	
第3回	上越市 上越文化会館	昭和62年11月1日(日) 13:00～15:00	
第4回	新潟大学医学部 第1講義室	昭和63年1月17日(日) 13:00～15:00	閉講式を兼ねる。

(ラジオ科目) 現代青年のライフスタイル

回数	会場	実施日時	備考
第1回	新潟大学医学部 第4講義室	昭和62年9月27日(日) 10:00～12:00	開講式を兼ねる。
第2回	長岡市 長岡市立中央図書館	昭和62年11月15日(日) 13:00～15:00	
第3回	新発田市 新発田市公民館	昭和62年11月29日(日) 13:00～15:00	
第4回	新潟大学医学部 第4講義室	昭和63年1月17日(日) 10:00～12:00	閉講式を兼ねる。

<再視聴>

(テレビ科目) 変動する地球 ー日本列島の成り立ちとその背景ー

実施場所	実施期間・日時	備考
新潟大学教育学部附属 教育実践研究指導センター	昭和62年10月5日～昭和63年1月11日 毎週月曜日 13:00～15:00	11月23日、12月28日、 1月4日を除く
新潟市中央公民館	第1回 昭和62年11月8日(日) 10:30～16:15 第2回 昭和62年12月20日(日) 10:30～16:45	

(ラジオ科目) 現代青年のライフスタイル

実施場所	実施期間・日時	備考
新潟大学教育学部附属 教育実践研究指導センター	昭和62年10月5日～昭和63年1月11日 毎週月曜日 13:00～15:00	11月23日、12月28日 1月4日を除く